

「テングタケの成長」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

真っ赤な傘の上に、白いイボイボがあるキノコ。ベニテングタケである。いかにも毒々しいキノコだが、実際に毒菌であるしかし、ベニテングタケはシラカバ林に多く、あまり目にする機会はないだろう。

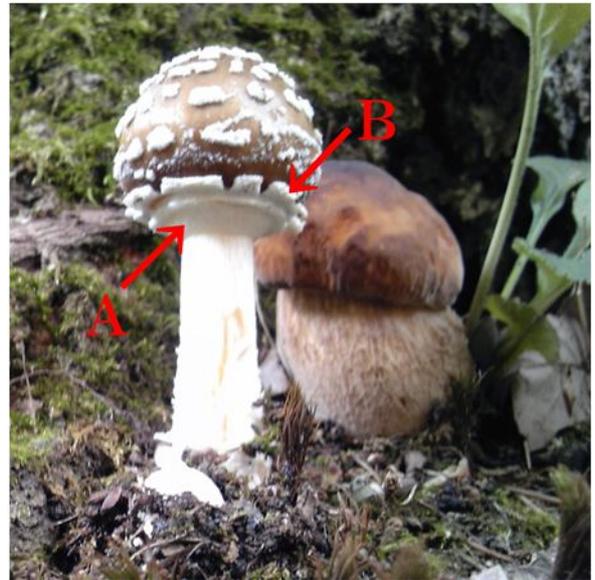


同じテングタケ科のキノコで、やはり傘に白いイボイボがあるキノコに「テングタケ(天狗茸)」がある。こちらは平地の雑木林に、ごく普通見られるので、子どもたちの観察カードや、絵だよりもよく登場する。地味な茶色で、食べられそうに見えるが、こちらも毒キノコである。毒の主成分はイボデン酸 $C_5H_6N_2O_4$ である。強いうま味のあるアミノ酸の一種で、テングタケは毒菌なのに、非常に美味なキノコだという。



「テングタケ」 *Amanita pantherina* (北軽井沢)

この白いイボイボの正体は、テングタケの子実体(キノコ本体)の成長の様子を見るとよくわかる。



上写真は、テングタケの幼菌である。テングタケ科のキノコは、地中の幼菌に時代に、子実体全体が膜(つぼ)に囲まれている。革質のものが多く、成長すると根元に残るが、テングタケの場合は脆く、傘の上に点々と散らばって着くのである(B)。右背後の地蔵のようなキノコは「ヤマドリタケ」である。



少し傘が開いたテングタケである。ヒダを覆っていた膜がやぶれて、茎に「つぼ(鏝)」(A)と呼ばれるものが残る。キノコの成長も面白いものだ。